第五章　流離の人々

一一月ポグロム

フォスコ・マライーニが来日したのは一九三八年一一月のことである。フォスコ，トパツィーア，ダーチャの三人は，三八年一〇月三一日にイタリア南部のブリンディシ港でコンテ・ヴェルデ号に乗船した。幼いダーチャの面倒を見るため，フォスコの母ヨイがブリンディシ港まで同行した。[1]

同年三月にはドイツがオーストリアを併合，一〇月にはチェコ・ズデーテン地方を併合していた。戦雲がヨーロッパを重く覆いつつある中，ヨイとフォスコは永別の予感を抱いていた。埠頭で見送るヨイは，夕闇の彼方に消えてゆくコンテ・ヴェルデ号をいつまでも見つめ続けていた。

地中海を東に向かうコンテ・ヴェルデ号とすれ違う形で，一隻の日本船がナポリを目指して西進していた。日本郵船の靖国丸（一九三〇年竣工，一一，九三〇総トン）である。この時，靖国丸には日独伊親善芸術使節として欧州巡業に向かう宝塚歌劇団一行五六名が乗船していた。[2]一一月二日，ナポリ港で下船した一行は，列車でベルリンに向かい，市内見学や，歓迎会に出席する。一一月一〇日，歌劇団は，ファザーネン街一三番地の稽古場で，公演演目の稽古を開始した。巡業総監督の秦豊吉（一八九二～一九五六）は，この日の出来事を，ごく簡単に日記に記している。

一一月十日（木）晴　午前ベルリン市内ユダヤ人商店打ち壊しの騒ぎあり。午後より邦君（註・現代舞踏家で当時留学生の邦正美一九〇八～二〇〇七）のお世話にてファザーネン街の稽古場を借受け，「雪」の稽古を初む。同家向かい側のユダヤ教会（シナゴーグ）放火せられ，終日燃えつつあり。[3]

この三日前の三八年一一月七日，ユダヤ人青年がドイツの外交官を暗殺する事件が起きた。その報復と称して，一一月九日夜，ナチス関係者がユダヤ人の住宅，商店，シナゴーグなどを襲撃・放火する。ドイツ中の街の通りには，破壊されたユダヤ人商店の残骸と，血まみれの遺体が散乱した。その凄惨な有様を「水晶の夜」と呼んだのは，ゲッベルス（Paul Joseph Goebbels 一八九七～一九四五）とされる。[4]割れたガラス片が月夜に美しく輝く夜という喩えは，実態と似て非なるレトリックであった。公式発表では九一名のユダヤ人が殺害された。さらに三万におよぶユダヤ人が強制収容所へ連行されている。

一九三三年に成立したナチス政権は，反対派を容赦なくダハウなどの強制収容所に送り込んだ。しかし政権の初期段階では，共産主義者など政治的反対者の弾圧を優先していた。また一九三六年にベ

ルリン・オリンピックの開催も予定しており，国際世論への配慮から，ユダヤ人に対する徹底な暴力行使は手控えていた。しかし一九三八年一一月九日のポグロム（虐殺）を境に，ナチスは本格的なユダヤ人迫害に乗り出す。

ポグロム以前から，ドイツとオーストリアに住むユダヤ人の多くは，身の危険を感じ始めており，事情の許す者は国外へ脱出していった。しかし，押し寄せるユダヤ難民に苦慮した各国は，一九三八年六月のエヴィアン会議で，ユダヤ難民の受け入れ停止を決定する。世界がユダヤ難民に門戸を閉ざした後，なお一ヵ所，渡航可能な場所が残されていた。上海である。

三七年七月から中国との全面戦争にのめり込んだ日本は，南京や上海を制圧していた。上海における中華民国の入国管理機能は麻痺し，事実上無審査で上陸できる状態が出現した。

一九三八年八月一五日，アンシュルス（註・Anschluss，オーストリア併合のこと）後，最初のオーストリアのユダヤ難民一五名がイタリア客船コンテ・ビアンカマノ号で上海に到着，その二週間後に女性一名と子供二名を含む一〇名がコンテ・ロッソ号で上陸した。これらの難民は比較的裕福だったが，出国するときわずかな所持金しか持ち出しを許されず，財産のほとんどは国に残し，ナチスに没収された。彼らはいずれも，上海在住のオーストリア難民委員会の世話になった。[5]

ドイツの港からも上海行きの客船は出ていたが，ユダヤ人にとってドイツ客船の居心地は甚だ悪かった。このため多くのユダヤ難民は枢軸同盟国イタリアに出国し――オーストリア併合によって国境が一つ減っていた――，ジェノヴァまたはトリエステからロイド・トリエスティノ社の船に乗って上海に渡った。

三八年八月の時点で上海に来た難民は，現地ユダヤ人社会から比較的手厚い支援を受けることができた。ヨーロッパと著しく環境の異なる上海ではあったが，物価が非常に安いため，どうにか生計を立てることができた。こうした情報はすぐ故国にも伝わり，上海を目指すユダヤ難民は急増した。

また，一九三八年一一月末に上海に入港したコンテ・ヴェルデ号で，ドイツ，オーストリアのユダヤ難民一八〇名が上陸し，上海のユダヤ難民は合計四六〇名に達していた。彼らの多くは一〇週間から三年にわたってダハウなどの強制収容所に拘留されたのち，出国を条件に釈放され，身のまわりのものを除いてほとんど着のみ着のままの状態で脱出したのであった。上海のユダヤ人たちは，彼らから強制収容所の恐るべき実態をはじめて知ったのである。[6]

この一八〇名のユダヤ難民を乗せたコンテ・ヴェルデ号に，マライーニ一家が乗り合わせたのだった。当時のコンテ・ヴェルデ号の

定員は六四〇名であったから，乗客の三分の一近くがユダヤ難民であったことになる。一一月ポグロム以前に収容所に拘留されていたことから，ユダヤ人の中でも反体制政治囚であったと思われる。マライーニが一一月ポグロムの報に接したのは，ボンベイ（現・ムンバイ）かコロンボあたりだろう。彼の著書に言及は見られないが，反ファシストの彼が，船内にひしめくユダヤ難民に気付かなかったはずがない。

一一月ポグロム以後，上海にはユダヤ難民が怒涛の如く押し寄せた。コンテ・ロッソ号，コンテ・ヴェルデ号，コンテ・ビアンカマノ号などロイド・トリエスティノ社の船は満員または定員超過の状態が続き，さながら難民救命ボートの様相を呈した。イギリス支配下にあるスエズ運河は，枢軸国側通貨による通行料支払いを拒否した。このためドイツ，イタリア側の保有外貨が減少すると，スエズ運河通行を断念し，希望峰廻りで上海に向かう船も現れる。その場合，本来四週間弱の航海期間が，倍以上の一〇週間を要した。一九四〇年六月一〇日のイタリア参戦により，海路による避難ルートは閉ざされた。よく知られる在リトアニア日本領事の杉原千畝（ちうね）（一九〇〇～一九八六）が発給したビザは，極東航路の休止後，シベリア鉄道経由で極東に向かおうとする難民に与えられたものだった。

一九四三年九月にイタリアが連合国に対して休戦すると，日本軍は上海に係留されたコンテ・ヴェルデ号を接収しようとした。コンテ・ヴェルデ号の乗組員は，接収に抵抗して船を自沈させている。

最終的に上海に逃れたユダヤ難民は約一七，〇〇〇人に上った。[7] 当初は同情的だった上海市民も，増加の一途を辿る難民の受け入れに苦慮し，住居，就職等で様々な軋轢が起きた。上海で商売を始めたユダヤ人も，日中戦争の激化で廃業を余儀なくされた。多くの難民は自活することができず，難民キャンプで極貧の暮らしに喘いだ。第二次世界大戦終結の喜びも束の間，故国ドイツ・オーストリアのユダヤ人社会がナチスの手で消し去られたことを知る。帰るべき国を失ったユダヤ人達は，中華人民共和国成立を前に，アメリカ合衆国やパレスチナなどへ再移住していった。

ユダヤ人の国外脱出

中井正一の先輩・三木清（一八九七～一九四五）は，岩波茂雄（一八八一～一九四六）から奨学金を得て，一九二二年にハイデルベルクに留学した。新カント派を代表するハインリヒ・リッケルト（Heinrich John Rickert 一八六三年～一九三六）およびその子弟らとの出会いは，三木の人生に大きな影響を与えた。このドイツの知性を象徴する大学都市にも，ナチスの圧力が迫る。ただし一九三五年頃までは，ハイデルベルクの教員もユダヤ人学生に学びの場を与えていた。

ヴィルフリート・ミラー（Wilfried Miller）は一九一六年，ハイデ

ルベルクの隣の都市マンハイムで，ユダヤ人医師の息子として生まれた。

私は一九三五年に実科ギムナジウムを卒業しました。ナチスが政権を取った時に，私の父は商業大学講師の職を追われ，いつの間にか銀行預金まで没収されていました。ただ，開業医として生計を得る道は残されていたため，自宅を診療所にして患者を受け入れていました。これでどうにか一家は暮らすことができました。私は一九三五年にギムナジウムを卒業したのですが，希望していた薬学部へ進学することはできませんでした。当時ユダヤ人は薬学を学ぶことを禁じられていたのです。

このため私は化学を学ぶことに決め，ハイデルベルクの大学へ進学しました。当時ユダヤ人に対しては入学制限があり，化学研究所で学ぶためには，研究室に所属する必要がありました。そこで私は研究所長を訪ね，私がユダヤ人であり，研究場所を探していることを伝えました。所長は何ら差別することなく，私を研究室に受け入れてくれました。

研究所の学生や所員は皆友達で，私は何一つ不当な扱いを受けませんでした。マンハイムのギムナジウムの同級生も何人かいました。マンハイムからハイデルベルクへは列車で三〇分だったので，朝は一緒に通学しました。[8]

世界屈指のコスモポリスとして繁栄し，共産党や社会民主党の牙城であったベルリンでも，一九三五年時点ではユダヤ人生徒に寛容に接する教員の姿が見られた。

ゲルハルト・ハイマン（Gerhard Heimann）は一九二九年ベルリンに生まれた。彼は金髪・碧眼で，外見上はナチスの称揚する典型的アーリア人種であった。彼の父は子供向け衣料品の行商をしていた。一九三五年，Gerhard は，ベルリン北東のプレンツラウアー駅に近い第二九ドイツ国民学校に入学する。

一九三五年の入学式当日，ゲルハルトは父グスタフと自宅を出て，アールベッカー通りを下って学校へ向かった。父はゲルハルトのためにセーラー服を新調した。濃い色の生地の上には大きな白いボタンが並び，白く広いカラーにスカーフがあつらえられていた。ゲルハルトは肩に新しい皮製の通学鞄をかけ，右手でしっかり抱えた。一方の左手には，ゲルハルトの背丈の半分ほどもある，円錐形のダンボール製筒を抱えていた。筒の中には，飴やお菓子を溢れんばかりに詰めて，学校が終った時に食べることにしていた。学校に着くと，ゲルハルトは新しい同級生と一緒に，教室の小さな机に着席した。父は飴の筒を受け取り，教室の後ろに立っている保護者達の列に加わった。保護者達は皆，持参したお菓子やプレゼントを床に置いていた。父は誇らしげにうなずき，ゲルハルトとウインクを交わした。

やがて校長が教室に現れ，微笑みながらゆっくりと話し始めた。「これからは毎日，先生が教室に入ってきたら，皆さんは特

別な方法で挨拶をしなければなりません。まず起立し，踵で床を踏み鳴らし，そして右腕を前に伸ばして，大きな声で『ハイル・ヒトラー』と言うのです。」

ゲルハルトは落着かない様子で手を挙げ，校長に向かって発言した。「みんなはそれでもいいけど，僕はできません。」

校長は驚いた様子だった。「なぜできないのかい？」

「僕はユダヤ人だからです。」グスタフは自慢げに答えた。父は普段から，グスタフと兄のベンノに，ユダヤ人は普通の人が信じることを信じないのだ，と教えていた。だからグスタフは，校長に向かって発言すれば，父が喜ぶと思ったのだった。しかしグスタフが教室の後ろを振り向いた時，父は唖然と口を開け，仰天して目をむいていた。

校長はゲルハルトの机に歩み寄り，ゲルハルトの深く青い目と，鮮やかな金髪を凝視した。そしてゲルハルトの父を呼び寄せた。

「このユダヤ人の子の体は，アドルフ・ヒトラーの人種理論を全部ひっくり返しているようです。」

入学式以降，学校の教員達は，ゲルハルトに，ナチ式敬礼やナチスの歌の斉唱を一切強制しなかった。同級生達も別にそれを気にせず，簡単に友達になることができた。ゲルハルトの通信簿には，全ての教員が，ゲルハルトは教室の中で皆と仲良く話をしている，と記入した。[9]

こうしたナチスへの消極的抵抗が見られた三〇年台前半のドイツの状況は，ファシズムが末端まで浸透していたイタリアの状況とは対照的であった。先に紹介したコンテ・ヴェルデ号乗組員ジョヴァンニ・ジョッタの父は，一九三三年にファシスト党地方組織から懲罰を受けたことがあった。[10]

当時イタリアでは，三歳以上の子供はファシスト系少年・少女団体へ加入を義務付けられていた。これはヒトラー・ユーゲントのイタリア版のようなもので，十二歳から一四歳の少年が加入する団体には「アヴァン・ギャルド」という名が付けられていた。ファシスト党地方組織は，ジョヴァンニのような貧しい家庭の子供へ優先的に制服を支給し，パレード等の催しへの参加を促した。ファシスト党なりの貧困層への配慮とも言えたが，ジョヴァンニの家は，それに応ずることができないほど困窮していた。少年時代に家計を支えるために漁に出て，その魚を市場で売らなければならなかったジョヴァンニは，パレードの欠席を繰り返した。

欠席を繰り返すうちに，何度か警告を受けました。そしてとうとう，私の父が街の広場に連れ出され，街中の人達の前で罵倒されたのです。この時のことは忘れられません。私の祖先は六〇〇年も前からこの街に住んでいたのです。それが十三歳の私のために，その街の人々の前で侮辱されたのです。

ジョヴァンニは，漁の技術を教えてくれた父を深く尊敬していた

だけに，この時の出来事はショックであった。しかしパレードに参加できようはずもなく，彼の欠席は続いた。業を煮やしたファシスト党地方組織は，とうとう彼の家に二名の警官を派遣した。

警官は私の父を逮捕し，鎖に繋いで連行していきました。見せしめのため，刑務所に直接向かわず，街の通りを引き回しました。その時の父の惨めな姿。恥辱のあまり頭をうなだれて，まるで本当の罪でも犯したかのように怖気づいていました。父の逮捕のニュースは電光石火で広がり，あっという間に街中の人達が見物に来ました。見物人は皆何かを喋っていました。「ジョッタさんは何をしたんだ？」「何か盗んだのかな？」「何か別の犯罪かな？」皆，好き勝手に推測していました。しかし罪など犯していないのです。何の罪もないのです。ただ彼の一三歳の息子がファシストのパレードを欠席したというだけなのです。

ただし，ジョヴァンニの父は五日間で釈放された。子供のパレード欠席で逮捕されたのは，ジョヴァンニの父だけではなかった。苦しい家計を助けるために働く子供は多かった。さすがの市民も耐えかねて，集団で街の警察署長に抗議した。

三六年にオリンピックを予定していたドイツも，直接的な暴力行使を控えただけであって，様々な形でユダヤ人の権利を奪うことに変わりはなかった。例えば一九三六年の秋からは，ユダヤ人行商の免許更新が厳しく制限されるようになった。ベルリンの小学生ゲルハルト・ハイマンの父も行商であった。父は第一次大戦中にロシアで捕虜となり，退役軍人として受勲したにもかかわらず，免許更新を拒否された。やむなく父は，ユダヤ人団体の斡旋を受け，ニュルンベルガー通りにある建物の管理業に就く。ハイマン一家も，父が管理する建物の一室に引っ越した。ユダヤ人への迫害は日に日に深刻になっていったが，青い目のゲルハルトは直接暴行を受けることはなかった。

しかし一一月のある日，ゲルハルトが学校へ行こうとしてアパートを出ると，何もかもが変わっていた。ゲルハルトは，通りの角を曲がったところにあるルーチンさんのタバコ屋の前で，思わず立ち止まった。ガラス窓が割られていたのだ。棚に綺麗に並べられていたタバコと葉巻は，ガラスの破片とともに店内に撒き散らされていた。隣のカリスキー寝具店の中も，破片と残骸の山だった。ダビデの星と「ユダヤ」という文字が，店の前面に白いペンキで描かれていた。ゲルハルトは戸惑い，恐怖を感じた。徒党を組んだ男達が，木の棍棒で通りの人を殴りながら走ってきた。ゲルハルトは走ってアパートに戻った。

ゲルハルトは管理人室で仕事をしていた父・グスタフのところへ駆け寄った。以前のグスタフならば，いずれドイツは良くなるさ，と言ってゲルハルトを安心させていた。しかし今は違った。もしグスタフが管理人室にいない時に何かあったら，ア

パートのどの部屋でもよいからベルを素早く三回鳴らすよう，ゲルハルトに言っていた。そしてアパートの住人が，ベルを鳴らした者をかくまうことになっていた。もっともナチスがグスタフを逮捕しに来ることは一度もなかった。アパートの住人は相互によく連絡を取っており，ハイマン一家を守り抜いてくれた。

しかしハイマン一家も，なるべく早くドイツを去らなければならないことは分かっていた。そこで，パレスチナへ移住する権利を得るため，十七歳の兄ベンノをユダヤ人団体の軍事教練機関に送り，訓練させていた。父グスタフはシオニズムに共感を抱いておらず，ただベンノを出国させたい一心から，軍事教練を受けさせていたのだった。しかし，やっと手に入れたベンノのパレスチナ移住権利証が，他のユダヤ人に盗まれてしまう。このため他の移住先を探さねばならなかった。

幸いにも，グスタフのいとこ・ハンスが一九三九年末に上海への渡航に成功していた。ハンスは二二歳で，共産主義に共鳴していた。このため一一月ポグロム以前から，既に危険な立場にあったが，どうにか逮捕を免れていた。そこでハンスは，ユダヤ人支援団体に依頼した。その際，ハンスは，アーリア人女性と関係を持ったと嘘を付き，身の危険を誇大にアピールした。当時こうした関係は「人種汚染」罪に問われ，厳罰に処せられていた。その結果，ハンスは上海渡航の支援を受けた上，上海随一のビクター・サッスーン・キャセイ・ホテルの職を斡旋してもらった。

数ヵ月後，ハイマン一家はハンスから手紙を受け取った。その手紙によれば，上海はごみごみして騒々しく，汚い街だが，物価は非常に安く，十分に生活できるとのことであった。ハイマン一家と，ハンスの父・サリーは，上海渡航を決意する。

ところで，ハイデルベルクの大学に無事入学できたヴィルフリート・ミラーも，入学三ヶ月目から差別を受けるようになっていた。

ある日，ナチ系学生自治会の学生がビラを配布しました。そのビラには私や友人のことが書かれていました。なぜ私と話したりするのか，私をドイツ人として認める気なのか，そんなことがナチ独特の用語で書いてありました。

その日以来，私は完全に孤立しました。三五年の，確か新学期開始から三ヶ月目のことだったと思います。それ以来，誰一人，私と口をきかなくなりました。ハイデルベルクで学んだ三年間，誰一人，私に話かける者がいなかったのです。あまりにも陰惨な日々でした。

ところで，私の親戚には，アイルランドで教授をしている人がいました。父は彼に手紙を出しました。するとその教授は，私を奨学金給付生として受入れ，化学の勉強を続けられるよう，手配をしてくれました。その時はもう，大喜びでした。

父はベルリンのアイルランド大使館へ車を飛ばし，私のため

のビザを申請しました。しかし申請はあっけなく却下されました。アイルランドの大学を卒業すれば，ドイツへの再入国は認められなかったのです。こうしてアイルランド留学の夢は潰えました。

そうしているうちに一九三八年が来ました。私はその頃，大学が休暇に入ると，いつもハンブルグのユダヤ人病院でアルバイトをしていました。その病院で，臨床化学や，組織学，病理学などを学び，十月に新学期が始まるとハイデルベルクへ戻っていました。

私の双子の兄は，三八年の九月にアメリカへ移住しました。

そして三八年一一月のポグロムの日が来る。襲撃団はミラーの実家にも近づいてきた。

暴徒が私の家の近くに来た時，父は私に，家から離れるようにと言いました。私は父の言うとおり，家を出てハイデルベルクへ向かいました。ハイデルベルクへ向かったのは朝で，駅の改札には，ＳＡかＳＳだったか，ナチの隊員が立っていました。私が持っていた学生証のお陰だと思いますが，無事改札を通ることができました。ハイデルベルクには，ユダヤ人学生などいないに等しかったからです。

ハイデルベルクに着いて，私は森の中を散歩することにしました。勿論研究所へは行かず，その代わり，私のおじの家へ行きました。私のおじは有名な法律家で，私はよく昼食を食べさせてもらっていました。その日も，いつもと同じように昼食をもらいました。私がおじの家を出た後，ゲシュタポが来たそうです。ゲシュタポはおじを検束しましたが，すぐに釈放したそうです。

父はゲシュタポに逮捕されました。逮捕される時，私の居場所を尋ねられましたが，母が「知らない」と答えました。

夜遅く，私は列車でマンハイムへ向かい，家に戻りました。母は，無事な私を見て喜びました。

この時，父はダハウへ向かう列車の中にいました。ただ，父は六五歳だったため，カールスルーエに戻され，釈放されました。

母は私を家の一番奥に押し込み，居場所を尋ねられる度に，知らないと答えていました。私のおばは，逆の方向を教えていました。

もはや私に時間は残されていませんでした。ですが一体どこへ行けばいいのでしょう？パスポートに「Ｊ」という文字が印刷されていれば，ビザを出す国はどこにもなく，ドイツに閉じ込められる以外なかったのです。唯一例外の国，国というより都市ですが，それが上海でした。上海であれば，ビザなしで上陸できました。

父と私は車でフランクフルトへ行き，必死で船の切符を探しました。そしてやっとの思いで，ジェノヴァ発上海行きの船の

切符を一枚手に入れました。

父は私をバーゼル駅まで見送りにきました。それが，私が見た父の最後の姿でした。[11]

出国を決めたユダヤ人は，短時間で準備をしなければならなかった。荷物を鞄に詰める際は，ゲシュタポ隊員に監視され，高価な金品がないかをチェックされた。ただし，隊員の目を盗んで金品を詰め込んだ者もいた。また中には寛大なゲシュタポ隊員もおり，金品持ち出しを見逃したり，出国手続きの助言をする者さえいた。

ルート・オスター（Ruth Oster）は一九三二年にラテナウで生まれた。ルートの父はユダヤ人の経営するデパートの店員であったが，一一月ポグロムで逮捕された。そしてポツダムに連行され後，さらにザクセンハウゼンへ移送された。国外移住を条件に釈放が認められることを知ったルートの母は，方々を奔走した末に上海行きの切符を手に入れる。オスター一家は一九三八年十二月に出国した。[12]

私の母は，上海への移住を決意し，苦労の末に出国許可証を手に入れました。そして親戚に頼んでお金を出し合ってもらい，船の切符を買いました。

実は，ポツダムか，ラテナウのゲシュタポ隊員が，母にこうした情報を教えてくれたのです。そのゲシュタポ隊員は，何人かのユダヤ人を助けていました。お陰で私達は，ベルリンの大使館や，その他の役所での手続きを素早く進めることができました。手に入れた出国許可証と乗船券を提示すると，父はザクセンハウゼンから釈放されました。

私達は，父の釈放から二四時間以内にドイツを出国しなければなりませんでした。出国時に所持できたのは，各人一〇マルクと鞄一つでした。こうして私達は出国し，上海に渡ったのです。

前に触れたように，ドイツとオーストリアのユダヤ人の多くは，いったんイタリアに出国し，ロイド・トリエスティノ社の客船に乗った。ユダヤ難民は異常な高値で切符を購入しなければならなかった。比較的廉価な三等切符の入手は困難で，二等以上，それもほとんどの場合は一等の切符しか残っていなかった。しかも一等切符さえ正規価格では購入できず，中には一〇倍で売られる事例さえ見られた。[13]

出国時の所持金は一〇マルクに制限されたが，これ以外に客船内のみで使用できる船内通貨（Bordgeld）を旅行代理店で購入し，所持することができた。この船内通貨を，船内売店で売られている宝飾品と交換し，上海到着後に換金する者も多かった。船内通貨を用いて，一等食堂の豪華な料理を楽しむ者もいた。

一九二四年にベルリンで生まれたギュンター・ブリス（Günther Bliss）と彼の家族が上海に渡ったのは一九三八年であった。当初は出国を渋っていた両親も，一一月ポグロムを機に上海行きを決意する。[14]

家族は皆，国を出たがりませんでした。私の兄は，その時もう結婚して子供もいたのですが，私に言いました。

「このまま待てばいいじゃないか。どうせナチスは戦争を起こして敗けるに決まってる。そうすれば奴らが国外追放だ。」

それまで出国したいと言っているのは，私だけでした。

しかし水晶の夜のあと，両親も出国を決意しました。私達は旅行代理店へ行くと，切符は売り切れていました。ですが私達はいくらか余分にお金を持っていました。私の両親は，他の人に見られないように，倍の金額を払いました。数日後，一枚だけ切符が代理店に届いていました。代理店の店長は父に言いました。

「今はこれしかありません。まあ今のところは。しかしもう少し待ってください。」

さらに数日後，家に電話がかかってきました。それは代理店からではなく，ある家族からでした。その家族は上海へ渡航しようとしていたのですが，事情があって延期したそうなのです。彼らは三枚の切符を持っていました。当然，定価以上の金額を求められたのですが，父はその額を支払い，ようやく上海行きの切符がそろいました。

私達の店は破壊されてしまいました。家具は残っていたのですが――それは大変美しい家具だったのですが，出国前に売却しました。ですがそのお金を持ち出すことはできませんでした。所持が許されたのは一〇マルクだけです。これが全部です。一〇マルクです。そして私達は上海へ渡りました。私たちは，私の親族の中で唯一出国できた家族です。父方の親族も，母方も，全員殺害されました。誰一人逃げることは出来ませんでした。ただの一人も。今，ここにいる私は，私の親族のただ一人の生き残りなのです。

ディアスポラ――流離の人々

ロイド・トリエスティノ社の代理店は，ユダヤ難民の足元を見て暴利をむさぼった。また，乗船券の闇マーケットが生まれ，詐欺も横行した。

しかし手に職を持つ難民の中には，船内で理髪をしたり，ショーを見せたりして収入を得る者もいた。手品師の卵であったグイド・シャンカー（Guido Shankar）もその一人である。彼は一九二二年にベルリンで生まれ，手品師になるための研修をしていた。上海へ渡った時の様子を，彼は次のように語っている。[15]

私の父とは言い合ったものです。

「まったくお前，上海に行ってどうするつもりだ？上海には知り合いもいない。言葉も分からない。しかもだ，あんな危険な

場所が他にあるか？一体どうやって暮らすんだ？まったく冒険でもしに行く気なのか。」
私は答えました。
「分かってるよ，父さん。でも，ここにいたって危険じゃないか。この国にとどまる方が，よほど冒険だよ。出国した方がまだましだよ。」
母は，私に賛成してくれました。あの時のような状況では，母の方がしっかりしていました。母は私に言いました。
「行きなさい。お前の渡航準備は私達がするわ。すぐ後で，私も行くわ。」
出国の時，金銭の所持は制限されました。所持が許されたのは，4ドルと，一〇マルクだけでした。ただ，服の中に物を詰め込んで出国する手がありました。そこで私は，着られるだけの服を着こみました。その上に，タキシードと手品道具を身につけ，さらに手品用品専門店で買った道具も詰め込みました。
それから，自分の写真も撮りました。手品師として仕事を始めるために必要だと思ったからです。私はまだ一六歳で，何の経験もありませんでしたが，手品の先生からいくらか実務的なことを教わっていました。求職のために写真が必要なことや，どうすれば業界関係者に近づけるか，多少のことは知っていました。
一番の問題は船の切符でしたが，両親がどんな苦労をしたことか…。息子の私のために両親がしてくれたことは，それこそ手品でした。両親は切符を手に入れてくれたのです。必要書類の作成だけでも大変だったはずです。私が手にした切符，それはハンブルグで売られていた切符でした。ベルリンでは売り切れでしたが，ハンブルグの代理店が買い占めた切符が残っていました。彼らは買い占めた切符を倍の値段で売っていたのです。それがどの代理店かは分かりません。
船会社はロイド・トリエスティノ社でした。皆が乗ってきた航路の会社です。その船の切符はことごとく闇市場に流れていました。聞き伝えや噂で切符のことを知り，定価では六五〇マルクくらいの上海行き切符が，一三〇〇マルクで売られていたようです。よくは分からないのですが，私の切符のために，両親の知人がお金を工面してくれたようです。そして母の友人，男友達ですが，彼がハンブルグに飛んで，奪うように切符を手に入れてくれたそうです。
こうして渡航の準備ができました。
列車でジェノヴァへ行き，そこから二九日間の船旅です。それは冒険のような日々でした。
船のデッキには，夜通し歩き回っている人たちがいました。彼らは強制収容所から出てきた人たちで，痩せていました。それはひどい痩せようで…，寝ることができないらしいのです。
私は船の中でマジックショーをしました。皆に気に入ってもらえたようで，少しですがお金を稼ぐこともできました。上海に着く頃には，一五〇ドルを貯めていました。

その後，グイド・シャンカーは上海で手品師となり，中国国内を巡業した。戦後はアメリカへ渡り，手品師の仕事を続けている。シャンカーの両親はドイツを出国することができず，ナチス政権下で殺害された。

不法な額で切符を売りさばいたロイド・トリエスティノ社であったが，いったん難民が船に乗れば特段の差別を受けることはなかった。実際，陸上の代理店の悪辣さに比べ，ロイド・トリエスティノ社の船員の多くは難民に同情的であった。同情的なばかりではない。船長自らが指示して船室を応急改造し，定員以上の難民を受け入れて運ぶ事例さえ見られた。ゲルハルト・ハイマンの一家も，このような応急船室で上海に渡ることができたのだった。

ハイマンの両親は，出国許可を得るために山のような書類を書き，船の切符を購入するために宝石を売り払わなければならなかった（駐・ハイマン一家は三等船室の切符を手に入れたようである）。荷造りの際には，三人の税関職員が監視していた。もっとも，ゲルハルトの母が豪勢な昼食を振舞うと，職員達は居眠りをはじめてしまった。

一九三九年五月末，ハイマン一家とサリーはベルリンを離れた。出発前，ゲルハルトはアパートの一軒一軒を訪ねて別れの挨拶をした。住人達は皆，彼のポケットに餞別のお金を入れてくれた。その合計金額は，所持制限の一〇マルクを大きく上回っていた。列車がオーストリアとイタリアの国境を越えるとき，国境警備隊の検査があったが，問題なく通過した。ジェノヴァに三日間滞在し，三九年五月三一日，コンテ・ビアンカマノ号に乗船した。

船は定員超過の状態で，九〇〇名近い客が乗っていた。船長は，乗船を切望する難民のために，船員寝室を改装し，数十室の応急客室を用意した。ハイマン一家とサリーは，船員達が「四等船室」と呼んだこれらの客室に入った。ゲルハルトの父，母，ベンノ，サリーは一つの船室に入った。ゲルハルトのみは，三名の女性客と同室となった。ゲルハルトは最下段の寝台で寝た。足を上げると，上段の寝台を蹴ってしまいそうになった。ゲルハルトは，上段の寝台に寝ている貧しい女性に，「蹴り上げ婆さん」というあだ名を付けた。

航海が始まってから数日間，船内食堂は大混雑だった。一一人が一つの丸テーブルに座り，それぞれに赤ワインのカラフが一つずつ置かれていた。出航三日目，給仕がナポレオンを持って来た。ナポレオンは乗客同士で奪い合いとなり，食堂はまるで暴動でも起きたかのような騒ぎになった。グスタフは，父から静かにするよう注意され，デザートの菓子が配り終わるまでじっと手を膝の上に置いていた。またある時，乗客の中にしつこく船長を追い回して，船内の環境に文句をつける者もいた。航海が一週間に入った時，とうとう船長は堪忍袋の緒を切らした。食堂にやってきた船長は，夕食の配膳が始まる前に厳しく

訓示した。乗船を懇願し，寝られるならどこでも構わないと言ったのは諸君だ，これ以上諸君の不平に耳を貸す気はない，不満ならば次の寄港地で下船してもらう，と告げた。

乗客達が文句を言うのも，海が穏やかなうちだけだった。船長の訓示があった翌日から，ビアンカマノ号は，しけに遭遇した。たちまち乗客のほとんどが激しい船酔いに襲われ，不平どころではなくなった。ゲルハルトの母は，船に酔ってはいないと言った。しかし彼女は航海の間じゅう，船酔いを防ぐためだと言って，船室に閉じこもっていた。ゲルハルト，ベンノ，グスタフ，サリーは，荒れる海でも平気だった。彼らのほか，コーンという名のワイン商も船酔いに強く，閑散とした食堂で，五人だけが夕食を取ることもしばしばあった。客がいなくても，各テーブルには必ずワインが置かれていた。コーンが片端からワインを飲み干す様子を，ゲルハルトは驚嘆しながら見守っていた。

船の混雑は，随分和らいだように見えた。そこでゲルハルトは船内の探検を始めた。彼は何名かの船員と友達になっており，特にエンリコ・ルーペという名の船員と親しくなった。エンリコは，以前の航海で，ゲルハルトの遠縁のいとこであるロッテ・エンゲルと知り合いになっていた。ロッテはハイマン一家に手紙を送り，航海ではエンリコを頼るように，と伝えていた。「四等船室」の乗客は，原則として下層デッキから上ってはならないことになっていた。しかしエンリコは，ゲルハルトのおじのような存在となり，船内至る所へ連れて行った。らせん階段を登り降りし，船員食堂や，果てはブリッジにまで入っていった。エンリコは，船内の食料分配を担当しており，いつもゲルハルトにたくさんの水やお菓子，果物を分けてくれた。寄港地で停泊した時には，乗船する税関職員にゲルハルトを付き添わせ，たくさんのチップをはずんでもらった。

コンテ・ビアンカマノ号が上海に着くと，ハンスが迎えに来た。ハンスはサリーを連れてホテルへ向かった。ハイマン一家は，当面の間，荊州路（Kinchow Road[16]）の難民キャンプに入所することになった。[17]

上海で船を降りた難民の多くは，学校の古い校舎などを流用したキャンプに押し込まれた。そしていつ終るとも知れぬ耐乏生活――最終的に一〇年に及んだ――に甘んじることになった。年配の難民は，キャンプで生涯を終える者も多かった。一ヶ月間の豊かな船上生活から，一転して窮乏の暮らしに突き落とされたのである。

にもかかわらず――あるいはそれゆえにと言うべきか――コンテ・ビアンカマノ号やコンテ・ヴェルデ号における船上生活を懐かしく思い出す難民は少なくなかった。高額な一等や二等の切符を売りつけられたことも，船上生活の思い出をより印象深いものにする一因となった。

難民の子供達にとっては，船旅は大冒険であった。当時一〇代の少年だったアルフレート・フェデラー（Alfred Federer）は次のよう

に回想している。

トリエステに到着した私達は，乗船までに一晩そこで過ごさなければなりませんでした。そしていよいよ乗船する時，その船の大きさに度肝を抜かれました。白い二万トンの船です。今なら大したこともないのでしょうが，その時は大変な船だったのです。私達の船室を見つけること自体が冒険でした。船室までの複雑な廊下は勿論，船内の至る所を何時間もかけて探検しました。まさに大冒険でした。

船上の時間は，それは楽しいものでした。三週間以上かけての船旅，本当にすばらしい時間でした。私は興奮を抑えられず，大冒険の主人公になった気分でした。私の両親も全く同じでした。母は毎日のように，船内のあらゆる人達とブリッジをしたりダンスをしていました。それはちょうど，ヴェスヴィオ山の頂上で万歳を叫ぶような気分でした。そう，それは難民達が万歳を叫ぶことのできる最後の時間でした。誰もがそれを知っていました。父も私に言いました。「今この時間を思う存分楽しみなさい。向こうに着いたらどうなるか分からないんだ。この船の上にいる限り，船内通貨で何でも買える。船にいる限り，家があるんだ。船を降りてしまえば…。」上海という外国の地で何が待っているのが，誰一人，想像することさえできませんでした。[18]

一等・二等船客としての旅では，すばらしい食事が提供され，船内は楽しい雰囲気に満ち，心身ともに癒された。難民の間には団結感や共感が生まれ，結婚する男女や，強固な商関係を築く者が多く現れた。[19]

ヨーロッパで非道な扱いを受け，上海で苦難の難民生活を強いられたユダヤ人にとって，ロイド・トリエスティノの船の中は唯一人間らしい待遇を受けた場所であった。恐らくこの時ほどコンテ・ヴェルデ号の食堂設備や音楽室が人の心を癒したことはあるまい。まるで船内公室を飾るコッペデやカヴァリエリの絵が，ディアスポラ（流離の人々）の苦しみを和らげる使命を帯びていたかのようにさえ見える。ポグロムを逃れた彼らが船上で過ごした時間は，「土曜日」の言葉を思い起こさせる。

美しいせせらぎ，可愛いい花，小さなめだかが走っている小川の上を覆うて，灰色の鉄道の線路が一直線に横切った時，ラスキンは凡ての人間の過去の親しいものが斜めに断切られてしまったかの様に戦慄したのである。しかし，テニソンはそのとき，芸術は自然の如く，その花をもって，鉄道の盛土を覆い得ると答えたのである。

この鉄路に咲く花は，千鈞の力を必要としたのではない。日々の絶間なき必要を守ったのである。我我の生きて此処に今居ることをしっかり手離さないこと，その批判を放棄しないことに

於いて，始めて，凡ての灰色の路線を，花をもって埋めることが出来るのである。

「土曜日」は人々が自分達の中に何が失われているかを想出す午後であり，まじめな夢が瞼に描かれ，本当の智慧がお互いに語合われ，明日のスケジュールが計画される夕である。はばかるところなき涙が涙ぐまれ，隔てなき微笑みが微笑まれる夜である。

（「土曜日」巻頭言一九三六年七月四日）

苛烈な迫害と弾圧を受けたがゆえに，美しいものへの渇望もまた激しかった。それは立野正一がフランソアを改装した動機にも通じる。労働者，被差別部落民，朝鮮人，中国人の苦悩を目の当たりにした立野は，だからこそ財を惜しまず，求め得る最良・最高の美をフランソアに刻み込んだのだった。そしてコンテ・ヴェルデ号の思い出が難民達の心を支えたように，フランソアで過ごした時間が学生や芸術家の後の人生を鼓舞していったのである。

しかし当然のことではあるが，美の与える慰めにも限界はあった。強制収容所を出所してすぐ乗船した難民は，ノイローゼ状態で船室に引きこもる者が多かった。他の船客と口論や暴力沙汰を起こす者もいた。[20]強制収容所の恐怖と絶望の前に，コッペデの装飾，シェフの料理，楽団の演奏，すべては無力であった。フランソアもまた，戦場と強制労働へ動員されていく若者達を前に，なす術もなく立ち尽くすほかなかったのである。

イタリア人抑留

一九四三年七月，イタリア軍の相次ぐ敗退の責任を問われたムッソリーニが失脚する。後任のピエトロ・バドリオ（Pietro Badoglio 一八七一～一九五六）は小田原評定の末，九月に連合国に無条件降伏する。これはドイツ，日本から見れば許しがたい裏切りであった。バドリオ政権は，五年前マライーニ一家が出航したブリンディシに臨時首都を置き，連合国の一員としてドイツと交戦する。ムッソリーニはドイツ軍に救出され，イタリア北部のサロに新政権を樹立した。しかしサロの政権は，事実上ドイツの傀儡に過ぎなかった。

日独伊同盟締結に乗じて京大文学部にイタリア語学科を開設した黒田正利も，消沈し切っていた。

イタリアの地理的状態と位置から考えて，敵の爆撃が必死であることは覚悟の前でなくてはなるまい，実際ジェノヴァやナポリを始め首都ローマに到るまで殆んど余すところなく重要なる都市は爆撃を受けた様である。戦争する以上，貴重なる生命の犠牲に於いて為されなくてはならぬことは勿論だとすれば，歴史的遺跡も芸術的記念物も当然運命を共にすべきことは常識である。之ら建築や美術品の保護のためには無論万全の策が取

られたことであろうが，何分これら諸都市が殆んど歴史と美術の博物館であると言って好いので，完全に保護することは絶対に不可能であろう。それよりも先決問題は強力なる国防と敢闘精神が欠如しては万事休す。それに況や今日の如く，シチリアを敵の基地に委ねたのはまだしものこと，見るが如き醜態の極を演ずるようでは，何とも手のつけ方は無い。同時に複雑な激戦場の一たる性格を帯びて来た今日，そうした文化的記念の生残は保し難いであろう。（中略）先にスカラ座が爆破されたことを聞いたとき，あるイタリアの友人は「世界的芸術殿」を失ったと嘆いた。[21]

イタリアの降伏を受け，上海に係留中だったコンテ・ヴェルデ号は，乗組員自身の手によって沈められた。四三年九月八日のことである。自沈の決断に至るまで，乗組員の間ではかなりの葛藤があったと思われる。結局，日本軍に接収されて連合国軍と戦うよりは，敵性外国人として抑留される道を選んだのだった。同じく上海で，イタリア海軍の機雷敷設艇レパント号（Lepanto）も自沈した。さらに日本占領域にあったイタリア海軍艦艇六隻，イタリア商船一一隻が乗組員によって破損させられた。

イタリア船員達の抵抗に日本政府は激昂した。「ピエトロ・バドリオ元帥閣下は三国同盟に対して重大なる反逆を犯した。」日本のラジオ放送が，世界に向けて激しい非難を流した。

日本はイタリア関係の資産を凍結し，極東に滞在する約一一〇〇人のイタリア人を拘束した。このうち約九〇〇人は上海に，残り二〇〇人が日本を含む他の地域にいた。極東にいたイタリア海軍の三隻の潜水艦カッペリーニ号（Cappellini），ジュリアーニ号（Giuliani），トレッリ号（Torelli）は自沈前に拿捕された。三隻は乗組員とともにドイツ海軍に引き渡され，終戦まで連合国と交戦した。[22]

ミッドウェーの敗退以降，次々に船舶を喪っていた日本は，港に沈んだコンテ・ヴェルデ号を諦める気など毛頭なかった。日本軍は港湾の建物に大量の鎖を結びつけ，その鎖の反対側を海中のコンテ・ヴェルデ号に緊結し，大型ウィンチで引き上げて再浮揚に成功した。軍はコンテ・ヴェルデ号をそのまま接収し，輸送艦への改造に着手する。[23]自沈または損傷させられた艦艇七隻，商船一二隻，計四六，〇〇〇トンはすべて接収した。[24]

日本政府の怒りは収まらず，在東京大使館員ら約五〇名のイタリア人が教会に集められ，ムッソリーニ政権への恭順を宣誓するよう要求された。しかし大半のイタリア人が宣誓を拒否したため，秋田県と愛知県の収容所に抑留されることになった。[25]この宣誓式に出なかった地方在住のイタリア人も，反ファシズム的とみなされた人物は抑留された。ベンチヴェンニとマライーニ一家が愛知県の収容所に連行されたのは三八年一〇月である。マライーニは滞日中に次女ユキ（Yuki Maraini 一九三九～），三女トニ（Toni Maraini 一九四一～）をもうけ，五人家族となっていた。マライーニ一家連行の数日

後，友人の森岡敏之（一九〇二～一九六七）が反戦ビラ頒布の嫌疑で京都府警に検束され，拷問を受けている。府警は，森岡がマライーニの教唆を受けたことを疑ったが，結局証拠を見つけられず一〇日余りで釈放した。石戸谷は，森岡の比較的早期の釈放について，次のように指摘している。

> 対米戦争の苦戦が次第に明白になってきたこの時期には，特高たちに開戦当時の空元気がなくなっていたとも考えられる。あるいは狂信的な官憲が比較的少ない京都という土地柄のおかげだったのかもしれない。[26]

収容所は名古屋の天白にあり，以前は松坂屋社員の夏季保養所として使用されていた建物であった。天白に収容されたイタリア人は，ベンチヴェンニ，マライーニ一家五名，美術史研究家ミケランジェロ・ピアチェンティーニ，化学技師サルヴァトーレ，フィアット代理店技師ヴィアレ，学生ブルーノ・ジョルダーニ，宣教師マルジェリア，その助手の修道士コルッシ，外人クラブ経営者デンティチェ Dentice，元満州大使ワイルショット（Comte Leone Weillschott），言語学者ヴァッカリの計一五名であった。彼らは四名の警察官に監視下で共同生活を送ることになる。

それまで日本人を信頼し尊敬してきたイタリア人は，この抑留生活で日本人の残酷さと向き合うことになった。イタリア人達に配給された食糧の半分以上は警察官達が横領し，たちまちイタリア人達の飢餓に陥った。夏季保養所として建てられた建物は，冬の生活に全く対応しておらず，寒さが飢餓に追い討ちをかけた。イタリア人達は，炊事，掃除，風呂焚きなどを分担したが，どうしても空腹に耐えられない時は，余分に作業をして食料を分けてもらうなどした。

四名の警察官のうち，西村という男は多少良心的であった。イタリア人達の苦境を見かねた西村は，時折彼らに食料を分け与えた。それも間もなく上官に見つかり中止させられ，西村は沖縄に更迭された。[27]

天白の抑留生活は，食料と暖房の欠如に加えて，警察官達が繰り出す無意味な命令で，さらに苦痛に満ちたものとなった。一ヶ所にとどまって読書をすることもままならず，部屋から部屋へ，一階から二階へと移動を強いられた。イタリア人達は，横暴な警察官の一人にラデツキーというあだ名を付けた。かつてカルロ・アルベルト率いるイタリア解放軍を打ち倒した軍人の姿を，この自由の抑圧者たる警察官に重ねたのであった。あるいは，こめかみから額にかけての特徴的な巻き毛が似ていたのかもしれない。

一九四四年七月，マライーニが警察官に抗議して，斧で自分の指を切り落とすという事件が起きる。マライーニが病院に運ばれる一方，ベンチヴェンニ，ピアチェンティーニは検束され，警察署に連行された。マライーニは尋問を受けたが，明確な敵対意思なしとして数日で釈放された。ベンチヴェンニは蚤だらけの留置所で二週間拘束された。石戸谷滋の「フォスコの愛した日本」は，ベンチヴェンニが釈放されて戻ってきたときの様子を次のように記している。

二週間後，ベンチヴェンニも釈放されて戻って来た。マライー二が建物の外に座っていると，突然幽霊のようなものがトイレの窓に現れるのが彼の目にはいった。ベンチヴェンニだった。目はくぼみ，頬は落ち込み，ひげは長く，シャツには血のしみがついて汚れていた。

「いや，殴られたわけではないんだ」と彼は説明した。「ノミにやられたのさ。七十匹ほどいたよ」

ピアチェンティー二とは違い，ベンチヴェンニは尋問攻めには合っていなかった。ノミがうようよいることで知られている独房にベンチヴェンニを入れることで，警察は彼を罰したのである。食事としては一日にジャガイモ一個と水を少しよこすだけだった。死を覚悟したベンチヴェンニは，時間が次第に早く流れていくように感じ始めていた。ある一定の時期を過ぎると半失神の状態に陥り，そうなるとほとんど快いほどだった，と彼は語って聞かせる。

ベンチヴェンニの帰還を祝い，誰かが特別の機会のために蓄えていた肉の缶詰を取り出した。ベンチヴェンニらしく，どうしても体を洗い，ひげを剃り，頭から足の先まで着替えると言い張る。それを終えてようやく，恐ろしく痩せて青ざめ，充血した目をし，シミひとつないシャツとズボンを身につけて彼は階段を下りて来る。それからベンチヴェンニは何かの儀式のように，缶詰の肉と，これも保存されていたわずかの飯を食べた。彼は何度も食事を中断しては，人生諸般について，また特に監獄での生活についての哲学的な所説を披露し，それに時々ノミの習性に関する学識を交えるのだった。[28]

この騒動の後，食料配給は若干改善されたが，飢餓状態を脱するにはほど遠かった。

一九四四年十二月からはB二九が名古屋に来襲する。四五年三月と五月の空襲は凄まじく，市郊外である天白付近にも爆弾が降り注いだ。近くの住宅や林で大火災が発生したが，収容所は辛くも被災を免れた。空襲後は近くにある八事斎場で犠牲者の火葬が続き，辺り一体に遺体の焼ける臭いが立ち込めた。[29]

一九四五年五月ドイツが降伏し，六月には沖縄が陥落する。イタリア人達は，五月に愛知県挙母（ころも）（現・豊田市）の広済寺に移送される。これは恐らく本土決戦に備え，外国人が脱走して反戦煽動を行うことを未然に防ぐ意図があったと思われる。マライーニは，連合軍上陸と同時に外国人を全員処刑する計画があったと推測している。[30]イタリア人が移送される前に，広済寺にはオランダ人抑留者達が先に到着していた。

暗澹たる予感のもとに始まった広済寺の生活は，しかし，天白の収容所とは大きく異なるものであった。曹洞宗・広済寺の住職・酒井善渓（ぜんけい）は，抑留者へ平等に食料を配分した。マライーニの三姉妹は，

仏前に供えられた米飯を隠れて食べた。酒井の母マサはそれを見てみぬふりをした。と言うよりも，ダーチャら三姉妹のひどい栄養状態を見かねて，わざと食べさせていたのだった。ダーチャ達は，すぐに酒井の娘・啓子（一九三七〜）と親しくなった。広済寺周辺の住民達も，抑留者達に食料を分け与えた。トパツィーアは住民達に刺繍を教え，その見返りにスイカを差し出す者さえいた。警察の監視も緩く，外出は無制限に近かった。イタリア人達は周辺の原野や林で，たんぽぽ，セリ，サルモモ，ワンゴシ，レンゲ，ヘビイチゴなどを採り，食料の足しにした。

ベンチヴェンニは相変わらず身なりの清潔に気遣い，寺の裏の池へ沐浴に通った。時折，ダーチャや啓子が，全裸で沐浴するベンチヴェンニを覗きに来た。堅物のベンチヴェンニも，その時は驚いて木陰に隠れるふりをした。

初夏の広済寺の境内にはタンポポが咲き乱れた。ハーブに親しんでいたベンチヴェンニは，タンポポにも興味を示した。すぐに彼は，梅の木の陰に咲くタンポポが，日向のものより柔らかいことに気付く。それを摘み取って空き缶に入れ，フォークで食べると美味であった。境内ではダーチャらと啓子がイタリア語でフレール・ジャックの歌を歌っていた。

Fra Martino, Campanaro,
（フラマティーノ，コンパーナーロ）
Dormi tu? Dormi tu?
（ドニトゥ?ドニトゥ?）
Suona le campane, Suona le campane,
（ソナネカパーネ，ソナネカパーネ）
Din, don, dan, Din, don, dan.
（ディンドンダン，ディンドンダン）

最悪の飢餓と虐待からは逃れた。しかし食料事情が苦しいことに変わりはなく，広済寺の人々の善意にも自ずと限界はあった。それに加え，抑留者達は戦局の悪化に恐怖を募らせていた。オランダ人達は隠し持っていたラジオで放送を傍受し，イタリア人達は山門で新聞配達を待ち構え，紙面をくまなく読んだ。いかに当時の報道が厳格な統制下にあったとはいえ，絶望的な戦況は覆い隠しようもなく伝わってきた。歴史上，国が滅びる時は，捕虜や政治囚も処刑されてきた。日本だけが歴史上の例外とは考えにくかった。マライーニは鐘楼をスケッチしながら，襲い来る死の恐怖を紛らわそうとした。彼が描いたスケッチは，今も広済寺に残されている。

ある雨の日，本堂を通りかかった啓子の姉は，天井を眺めているベンチヴェンニに気付いた。屋根裏から滴る雨滴を，彼はいつまでも見つめていた。東寺で灌頂を受けた梅雨の日のことを思い出していたのだろうか。あるいは故郷フィレンツェを思っていたのだろうか。その横顔は悲しく美しかった。

学徒出陣と疎開

一九三七年に出獄した河上肇は，漢詩や自叙伝の執筆に没入していた。四一年末，河上は東京から京都に移住する。翌四二年の暮れ，京大農学部前の喫茶店・進々堂のパンの評判を聞いた河上は，家族とともに同店を訪れた。

酒を一滴も嗜まなかった河上は大の甘党であった。獄中の河上は，留学時代パリの客舎で味ったプチパンのうまさを頻りに思い出すが，京都の長女からの手紙で，京大裏門の近くに開店した進々堂というパン屋の評判をきき，「出獄の暁には早速京都へ出掛けて思ふ存分御馳走にならうぞ」と，そのパンを食べる日を楽しみにしていた。

しかし国内の食糧事情は悪化し，行列をしなければパンにありつけない状態になっていた。

いま眼の前に，ただ一片のパンが配られるのを何時間も前から待っているこの影の薄い老人を，誰が河上肇だと知っていよう。否，いまこの場所に来ている人達は河上肇といってみたところで何処のどうしたひとであるのやら，その名前すら知らないような人種ばかりなのだ。この人達のために闘い，この人達のために職を逐われ，またこの人達のために獄に繋がれたひとであるのに――。先生はただいつまでもいつまでもぽつねんとして坐っておられるだけであった。気のせいかその姿はいかにもうら淋しかった。[31]

戦時中のフランソアは，敵性語の禁圧から店名を「純喫茶・都茶房」と改める。備蓄のお陰で，しばらくはコーヒーを提供し続けることができたが，やがてコーヒー豆も払底し，止む無く番茶や干しバナナを出した。以前の通りクラッシックのレコードはかけられていたが，熱心に耳を傾ける客は少なくなっていった。真珠湾攻撃から七ヵ月を過ぎた一九四二年七月五日付けの京都帝国大学新聞に，その頃の喫茶店の様子が記されている。

学生は専ら喫茶店へ菓子を食べに，それも大勢で来るようになり，一人でレコードを静かに聞くとか，雰囲気を楽しみに来るものが少なくなったと言う，これは生白い奴が姿を消したのか，自分を凝視する事をしなくなったのか，或はそのいずれとも言えるのであろうが，又殆んど帝大生でもって居る某々店のおやじはこんなことも言っていた，私等此処で聞いててもほんまに感心させられますわ，三年の方などしんみり落ち着いてられて出征についても立派な覚悟を持って居られるし，教練のことでも昔と違って，今は何て言うか，真面目に意義を感じてはって，自分を修練すると言う様な気持ちと違いますかと，えら

く認めてくれたが，飲み屋に近いある店では，デカダン的なニヒリスト的な色彩が増えて来た様に見え，落ち着きがなくなったと言う。

これはどちらも本当だと思うし別人である場合も同一人である場合もあるが，こんな事が言えると思う，健全な人は更に健全に，デカダンの傾向を持った人の中で，どうにも助からず益々デカダンになって行く兆候も見せているのだと思う。[32]

京大では一九四二年度卒業生から在学年限が六ヶ月短縮された。また，それまでボランティア的性格の強かった学生の労働奉仕が，一九四三年四月頃から強制的な動員に変わっていった。待避壕の建設，薪の運搬，草刈りなどの作業へ，当初は二日程度，そして一週間と動員期間が延びていった。

ベンチヴェンニ，マライーニらが抑留された四三年一〇月，文系学生の徴兵猶予が撤廃される。翌一一月二〇日，農学部グラウンドにおいて出陣学徒壮行式が挙行された。イタリア語学科でマライーニの薫陶を受けた学生もまた戦地に赴くことになった。須田国太郎は，壮行式の様子を次のように記している。

黒づくめの制帽制服に身をかためた，我京大学徒出陣隊が大競技場に勢揃いして今日壮行式に移ろうとする光景は正に全学の緊張この一瞬に集まるというも過言でなかった。比叡の秀峰，遥かに北山の連山は次第に朝曙から抜け出しつつある間近かの赤い民家の屋根に黄葉した立ち樹が紫の影を宿している。紅白の，幕の中央に一団高く白布につつまれた壇上に総長が上る，朝の冷気に号令が入り乱れて，また再び水を打ったような静けさに戻る。総長の送別の辞，マイクが山彦して一句々々肺腑を衝く，残留生の壮行の辞，出陣代表の答辞，これにつづいた分列行進，いずれも沈痛たる悲壮そのものである。征くべき学徒は，戦場へは軍人としてあらわれるのであろう。けれども，ここでは学生のままで既に戦いの野に一歩を踏み出している。国家有用な学の完習を俟たずして去るのである。ここに国家非常の様相が如実に見られるのである。それが今来たのである。武人が武人としてではなく，武人としての学生を我々は，この壮行式に於いてみているのである。そこには何等の華々しさはない。黒い学生服が一塊となって行進していく。緑，紫，青などの部類の小旗が隊の区切りをつけるだけだが，若き魂の一団になって家庭から流れ出てゆくのを覚える。国家国難に対する一層なる決意をこの壮行式によって固めるのであった。[33]

「いずれも沈痛たる悲壮そのもの」「国家有用な学の完習を俟たずして去る」「そこには何等の華々しさはない」などの文句はぎりぎりの抗議と受け止められなくもないが，学徒出陣そのものに反対することなど思いもよらなかった。須田は，この壮行式の様子をスケッチに描き取り，一〇〇号の油彩画として完成させている。[34]

全学壮行会と相前後して，朝鮮と台湾出身の出征志願学生の壮行

会も開かれている。朝鮮半島出身学生に対しては一一月一一日に楽友会館で，台湾出身学生に対しては一二月九日に平安神宮でそれぞれ壮行式が挙行された。[35] [36]

フランソアの常連の中にも出征する学生がいた。留志子とスタッフ達は彼らを京都駅まで見送った。[37]学徒出陣によって文系学部の学生は激減し，残留した学生にも年間四カ月の勤労動員が課せられた。かつて河上肇や瀧川幸辰が教鞭を取った経済学部，法学部は見る影もなくなっていた。それでもなお，動員作業の夕方には，短歌俳句の集いや源氏物語の研究会を開く学生の姿が見られた。[38]フランソアにおいても，レコードを聴き続ける学生の姿はまだ失われていなかった。一九四二年四月に三高に入学し，四九年月まで京大に在籍した村田敬次郎（一九二四〜二〇〇三）も，そうした文学部学生の一人であった。

――その間，軍隊に入ったり，郷里に帰省したりの期間以外は，殆ど京都にいた。いわゆる戦中派である私達には，この数年間の京都生活がかけがえのない青春の年月であった。木造りの校舎，校門のすぐ近くにあった校庭の築山。紀念祭の集り。その強い個性の故に親しみを感じた先生方の講義や友人達との語らい…。その一こま一こまが，走馬燈のように四十数年をへて，私の脳裡に浮んでくる日々である。人間として純粋に人生を考えた。思索した。

折にふれ河原町三条，祇園かいわいにはホウバの下駄をつっかけて，東一条のあたりからマントを背に千米以上も歩いてゆくのである。ある春の夕刻，河原町四条の角に，詩人の宮野尾文平君がたたずんでいた。

「どうしたの」

と声をかけると，彼，

「春が来たとて何としよう，いとしいあの子がくるじゃなし。」

と口づさんで，私の方に人なつっこい顔を見せるのである。二人で茶を飲みにゆく。“フランソア”だったか，モナ・リザの大きな複製のかかった，クラシックをレコードでたっぷり聴かせてくれる店である。“ニュー・カレドニア。”“シャン・クレール”などと共によく学生達が行った店だ。共に語りあった友人とのこんな情景が昨日のように浮んでくる。

その宮野尾君も沖縄上空で散華された…。[39]

立野の美工時代の先輩，澤田石民（せきみん）は一九四三年から軍に召集されていたが，四四年九月一五日，ビルマで戦死した。[40]同年末から日本の各都市への空襲が激しくなる。関西への爆撃も時間の問題に思われた。

「土曜日」メンバーの一人である武谷三男は，原子核・素粒子理論に通じた物理学者であった。アメリカの具体的な原爆製造計画までは知る由もなかったが，その理論上の破壊力は理解していた。「マッチ箱一つの大きさで都市を破壊する爆弾」，彼は周囲にそう説明し

ていた。

中井正一は，郷里の尾道への疎開を考えるが，そのためには第三者による身元保証が必要であった。中井は病身の母・千代を尾道の実家に送り届ける傍ら，同地で職を探す。中井の長女・由紀子（岡田由紀子，一九三〇〜）は回想する。

（中井正一が）祖母（千代）と共に尾道に帰り，知人を尋ね就職を頼んで歩いた中で，市長をされていた田坂さん（註・田坂寧邦（やすくに））から「無給でよければ，市立図書館長の役職が空いているが」と言っていただいたのだ。父は本当に夢かと思うほど嬉しかったと話していた。

図書館は休館中で，窓も扉も閉じていたが，父にとっては最高の仕事場であった。

その朗報をもって帰洛した汽車は，大阪の大空襲の寸前を走りぬけ，真夜中の京都駅から下賀茂の家まで徒歩で帰り着いた父を，私たちは道端の防空壕で迎えた。

大阪の空は夜を徹して真っ赤に燃えていた。

大阪への空爆は四五年三月一三日深夜から翌十四日未明に実施された。それまで重慶爆撃を対岸の火事と見ていた関西人は，ようやく戦略爆撃の恐るべき威力を思い知った。尾道からの汽車は京都駅までたどり着いたが，京都市電は空襲を警戒して全線不通となっていた。中井は四条まで来たところで，重い行李をフランソア喫茶室の店内に放り込み，下賀茂の自宅に避難した。

もはや京都への空襲を疑う者はいなかった。中井正一は，由紀子ら三姉妹を尾道に疎開させる一方，長男は宮崎の航空高専に進学させる。中井自身は妻と共に京都で後始末をし，六月に尾道へ疎開した。尾道にも連日空襲警報が鳴り響き，近隣の福山も焼けた。

空き家となった下鴨の中井の家には，代わって立野正一の一家が住むことになった。立野はフランソアの営業を休止し，椅子やテーブルを下鴨の家に疎開させた。僅か三年前に改装した店舗も，間もなく灰燼に帰すものと観念した。広済寺のイタリア人達と同じく，立野や中井らも自分の運命に思いを巡らせた。治安維持法の嫌疑者として，彼らもまた体制崩壊を前に処刑されるのだろうか？　中井が娘達に死の覚悟を吐露したのは，広島に原爆が投下された日の夜であった。

そして八月六日。翌日の学校で様々な噂がとびかい，傷ついた方が駅から降りられたと聞いた。

その夜，父は家族を集めた。

「今度広島に落とした物は，原子爆弾といって，たった一個で広島中を焼いてしまう爆弾だ。武谷三男君から聞いていたが，これが，実際に使われるようになってしまったら，もう今までのような戦争は出来ない。もう間もなく戦争は終わるだろう。皆も，うすうすは気付いていただろうが，お父さんはこの戦

争が起こらないように話し合っていこうと反対していた。そのために，二年間拘置され，病気のあとは家で勉強していたのだ。

多くの国の歴史書を読むと，戦いの終わる時，権力者に反対した思想家は，その国の権力者に殺されるか，又は侵入した占領者によって殺されることが多い。今，日本もどんな形で戦争が終わるか全く予想がつかない。お父さんも無事でいられないかもしれない。何が起ってもきっと生き延びて，歴史の証人になれ」

今思うと父は死を覚悟していたのだろう。終戦の放送を聞いて無言で瞑目していた父の姿が目に残っている。

日本政府は，捕虜や政治囚に手を下す前に，そして京都が焼き払われる前に，ポツダム宣言を受諾した。しかし治安維持法はまだ生きていた。四五年九月末，同法違反で豊多摩刑務所に収監されていた三木清が，疥癬にまみれて死亡する。この事実を知った占領軍の指示により，ようやく同法は廃止された。治安維持法による犠牲者は，虐殺六五名，拷問による獄死一一四名，病死その他一五〇三名とされる。[41]

――明日は死刑法，治安維持法が上程される。私はその反対のために今夜東上する。反対演説もやるつもりだが，質問打切のためやれなくなるだろう。実に今や階級的立場を守るのはただ一人だ。だが僕は寂しくない。「山宣」一人孤塁を守る。しかし背後には多数の同志が――

山本宣治の死の前日の訴えから一六年，日本の労働運動は全滅し，遂に労働者自らの手で治安維持法を撤廃することは叶わなかった。

第五章　参考文献

1 Maraini, Dacaia “Ein Schiff nach Kobe” Das Tagebuch meiner mutter, Aus dem Italienischen von Eva-Maria Wager, Pieper Verlag GmbH, München, 2003, p.10

2 「寶塚歌劇四十年史」宝塚歌劇団出版部，一九五四年，八二ページ

3 岩淵達治「水晶の夜，タカラヅカ」青土社，二〇〇四年，七二～七三ページ

4 シェーンベルナー，ゲルハルト編，栗山次郎ほか訳「証言『第三帝国』のユダヤ人迫害」柏書房，二〇〇一年，四三〇ページ

5 丸山直起「太平洋戦争と上海のユダヤ難民」法政大学出版局，二〇〇五年，六一ページ

6 同，六一～六二ページ

7 Lohfeld, Wiebke und Hochstadt, Steve “Die Emigration jüdischer Deutscher und Österreicher nach Shanghai als Verfolgte im Nationalsozialismus” p.2

8 http://www.exil-archiv.de/grafik/themen/exilstationen/shanghai.pdf

9 同，pp.15-16.

10 同，pp.6-7.

Giovanni Giotta & Kristen Jensen, “Giovanni Giotta---Song of the Fisherman”

http://www.istrianet.org/istria/people/biographies/giotta/giotta1.htm
11 Lohfeld und Hochstadt（前掲）, pp.6-7.
12 同, p.10.
13 Kranzler, David H. “The history of the Jewish refugee community of Shanghai 1938-1945” 1971, pp.4-5.
14 Lohfeld und Hochstadt（前掲）, p.9.
15 同, p.9.
16 丸山「太平洋戦争と上海のユダヤ難民」（前掲）, 六八ページ
17 Ross, James R. “Escape to Shanghai : a Jewish community in China” Free Press, 1994, pp.42-50.
18 Lohfeld und Hochstadt（前掲）, p.11.
19 Kranzler “The history of the Jewish refugee community of Shanghai 1938-1945”（前掲）, p8.
20 同, p.9
21 黒田正利『『スカラ』を憶う―失はれたイタリアの文化―」京都帝国大学新聞, 一九四三年九月二〇日付, 第三六九号, 二ページ
22 “More Loot” Monday, Time, Sep. 27, 1943. http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,850321,00.html?iid=chix-sphere
23 Ross.”Escape to Shanghai”（前掲）, p.210
24 「日本商船隊戦時遭難史」海上労働協会, 一九六二年, 二五三ページ
25 石戸谷滋「フォスコの愛した日本―受難のなかで結ぶ友情」風媒社, 一九八九年, 九六～九七ページ
26 同, 八八～九二ページ
27 同, 九八ページ
28 同, 一一四～一二三ページ
29 「昭和区誌」昭和区制施行５０周年記念事業委員会, 一九八七年, 三〇二～三二三ページ
30 Mraini, Fosco “Meeting with Japan” translated from the Italian by Eric Mosbacher, Viking Press, New York, 1959,p.409.
31 西川勉編「河上肇　アルバム評伝」新評論, 一九八〇, 八九ページ
32 「我々の建設――“建設”成否の要諦（消費生活）」京都帝国大学新聞, 一九四二年七月五日付, 第三五〇号, 三ページ
33 須田国太郎「壮行式」京都帝国大学新聞, 一九四三年一二月五日付, 第三七四号, 四ページ
34 京都帝国大学新聞, 一九四三年一二月五日付, 第三七四号, 一ページ
35 同, 一九四三年一一月二〇日付, 第三七三号
36 同, 一九四三年一二月二〇日付, 第三七五号
37 「写真図説　紅萌ゆる丘の花　第三高等学校８０年史」講談社, 一九七三年, 一五四ページ
38 京都大學文學部編「京都大学文学部五十年史」一九五六年, 三六ページ
39 村田敬次郎「失いし時を求めて―三高の頃―」三高会館だより, 三高会館, 一九八五年, 一～二ページ
40 油井一人編「２０世紀物故日本画家事典」美術年鑑社, 一九九八年, 一九七～一九八ページ
41 松雄洋「治安維持法―弾圧と抵抗の歴史―」一九七一年, 一〇ページ